

そんな最低な、

愛すべき日々。



3



メリ

いつも見る、夢がある。

初めて見たのはいつだったかも覚えていないが、幼い頃からずっと見続けている夢が。

その夢では俺はゆらゆらと水中に浮かんでいる。
難破して沈んだかの様な船の中だ。目の前にはいかにもな舵輪が見える。

夜なのか全体的に暗いが、大破して大穴が開いた壁の外からは光が差し込んでいる。
おそらくは、太陽ではなくて月の光だろう。ひどく静謐な光。
それに照らされ、辺りは薄ぼんやりと明るい。光が透ける水は深い青。冷たそうな色だ。

起きてから考えた事だが、きつとこの辺は映画のタイタニックの影響を受けている気がする。もっともこの夢自体はかなり幼い頃から、映画が公開される前から見ているが。

それに音楽がそぐわない。
ゆらゆらと水中に漂う俺に聴こえているのはタイタニックのあのドラマチックな女性歌手の歌声ではなく、ひどくシンプルなピアノの音。

夢の中の俺は思う。ああ、エリック・サティのジムノペディだな。
俺はしばらく、ポツリ、ポツリと何かを呟いているようなピアノのメロディを聴いている。

此处で目が覚める事もある。だが大抵はもう少し進む。

舵輪のある部屋にいた俺は、いつの間にかホールの様な広い場所に来ている。曲も先程までの第一番から第二番へと進んでいる。
第二番は、俺にはピアノのメロディは、何故、何故と問い掛けているように聴こえる。短調の為もあり、どこか物悲しい。

俺はホールを見渡す。
きっと昔は豪華だったろうホールは沈没の影響で破壊され、長年の海流の浸食によりボロボロになり、さらに藻が繁っていて見る影もない。

ふと、隅にある物が目に入る。このホールはカジノも兼ねていたのか、ルーレットテーブル。片側の脚が折れているので傾いていて、床に色褪せたチップが散らばっていた。

何故、と問い掛けるメロディーを聴きながら、ぼんやりそれを眺めていると何か懐かしいような

気分になる。

思い出しそうで思い出せないじれっさを感じながら見ていると、ふと、それまで青一色だった視界の端に、違う色が混ざっている事に気が付く。

ゆっくりとそちらに目を向けると。

赤いカクテルドレスを着た女がけだるそうに壁に寄り掛かり、立っていた。

ちょうど、曲は第二番が終わる所。

大抵はここで目を覚ます。

だが、今回は進めるようだ。

今度は、船はまだ壊れていない。

船の中のバーなのだろうか、周りにはカウンターやテーブル、椅子等が並んでいる。

沈没していないようだが、やはり視界は青く、薄暗い。

小さなステージの様な場所で、先程の女がグランドピアノを弾いていた。

曲は勿論、ジムノペディ。

物語るような第一番から問い掛ける第二番へ。そして夢で初めて最後の第三番へと進む。

第二番での問い掛けに答えるような、少し希望が見えたような、しかし今までの法則を崩すメロディの動きもあり、不安感をも感じさせる。

俺はそれを聴いている。一人掛けのソファに腰掛けて。今度はちゃんと体があるようだ。

静かに曲が終わり、俺は拍手をする。

「ブラボー、リラ。クラシックも弾けたんだ」

女は綺麗な顔で呆れたように言う。

「その台詞は前にも聞いた」

「うん、沈む時、リラがこれ弾いたからね」

「アンタいつまで此処にいるの？」

カタン、とピアノのポールを外し、天板を下ろした。

「未練がましくこんな所で幽霊の真似事なんかしちゃって」

「似合わない？まあ脅かす人間いないと幽霊もつまらないけど」

「幽霊って普通恨みとか持ってるものでしょ？自分で沈めた船に出るのってどうなのよ」

心底呆れたようにリラが言う。

「わかっちゃいるけどどうにも此処から出られなくなっちゃって」

エヘ。と笑うとリラがため息をついた。

「だから迎えに来たのよ。もう生まれてるのに、前に捕われてちゃどうしようもない」

「あれ、優しいじゃん。やっぱり俺に逢いたいなの？」

「自惚れるんじゃないわよ。これは貸し」

綺麗な顔が台なしの仏頂面で手を差し出す。

「行くわよ。アンタと何度会った所でろくな事になった例しがないけど。此処は寒いし一応連れてってあげるわ」

「やっさしーい。どうせろくでもなくてもさ、今更リラ居ないとか考えられないよ」

そう言ったら。

仏頂面だったリラが少し嬉しそうに笑って。

「それなら早く私を見つけなさいね」

そう言ったりラの手を取った瞬間、ぐうん、と引っ張られる感じがした。

ガクンッ

と落ちてきたように目が覚めた。

夢の印象があまりに鮮やかだった為に、最初自分がベッドに寝ているのが理解できなかった。

夢だったのが分かれると途端に襲ってくる寂しさに、ああいつもの夢を見ていたのかと気づく。第二番までは覚えているのに、何故か第三番は記憶に残らない。寂しさが残るだけだ。

起きてしまえば瞼の裏に残る笑顔が誰の物だったかは思い出せず。そのうちそれを忘れた事こそが寂しいのだということすら。忘れてしまうのだった。

「リラ、どこでも良い、とにかく金使って旅行に行こう」

京介がそう言い出したのは修学旅行のすぐ後だった。

お互い団体行動なんて大の苦手、それでなくともガキ共と何日も四六時中一緒に居なきゃいけないだけで堪え難い、何よりも格安旅行なんてクソ喰らえ！旅館は贅沢で人が少なくてなんぼだろ、いくら広くても温泉に人が5人以上いる時点で有り得ない！というような不況時の若者に相応しくない主義を持っていたので、修学旅行なんて忍耐力を試す修業以外の何物でもなかった。

いやいや分かっている、私立でもなんでもない普通の高校の生徒なんて金を使う旅行なんてしたことがないだろう、だから修学旅行だってこれが普通なのは理解している。だが頭で理解していてもたやすく順応出来るものではないだろう。体がどうしたって受け付けない

そんな状況を表す例えをだすならば。

それは、普通の寿司屋で食べ慣れている人間が回転寿司に入って「こんなもの食えるか！」となるのと感覚的に全く一緒だ。

値段的にもシステマ的にも回転寿司が不味いのは理解しているし、そもそも期待もしていないのだが、それでも口に入れる気にはならないだろう。お腹が空いていても食べない方がマシだと思うかもしれない。

実際、友人と回転寿司に入った時、げんなりしているのを顔に出さない様に苦労している私の横で「やっぱりお寿司マジウマイよね～」とか言いながらシャリがパッサパサの寿司をなんの疑問もなくみんな食べていたが。聞けばやはり回らない寿司屋には行ったことがないらしい。むしろそれ幸せかも。贅沢を知らなければそれを望むことなく、どこでも、遅しく、生きていけるのだから。でもそうはなりたくない。

というような議論を修学旅行後のストレスが溜まりに溜まった状態で交わしあっている所で冒頭の京介の台詞が出たのだ。

「それ賛成。日程的に近場しか無理だけど、その分高級保養地にでも行ってやりましょう」

ダラダラ話していたソファから思わず身を乗り出して話に乗った。

「勿論旅館は最大10人くらいしか泊まれないような高級少人数制のトコで。ガイドブックにも乗らなくて一般庶民には縁遠いってぐらいの所が望ましいね！」

珍しく京介が目をギラギラさせながら言う。よっぽど修学旅行のホテルの大浴場での芋洗い状態がカルチャーショックだったらしい。

「勿論部屋にも個別の露天風呂がついてて？」

「勿論浴衣なんか数ある種類から選べちゃったりして」

「ご飯は部屋出しの懐石ね。」

「てかさ、これ全部普通だよねえ」

その意見には賛成しかねるが。

金銭的にやれるヤツはやって良いのだ。

色々条件を確認して検討した結果。

箱根に行くことに決定した。近くて高級。言うことなし。

旅館は京介が言っていた条件通りの5部屋程しかない一見さんお断りの老舗旅館。よく芸能人がお忍びで行くところ。箱根のその辺りにはそんな旅館が何軒かある。

「あー、これこそ旅行って感じ？」

京介がしみじみと言うのはロマンスカー車内。指定席だから広々。

「へえ、お坊ちゃんなら電車じゃなくて自家用車で行かなきゃぐらい言うかと思ったのに」

ニヤリと笑って意地悪く言ってやると、

「イヤイヤ、一応学生ですからー？それに箱根行くのにロマンスカーって形式美じゃん」

「形式美ねえ。でも向こう着いたらタクシーでしょ？」

「当然。歩くのヤダし」

「うん、アンタの感覚はよく解らないけど歩かない事は賛成」

修学旅行の自由行動の時にもタクシーを使わない事を散々不条理だと喚いていた京介だ。タクシーは自分の足。

その足を使って無事に素早く快適に旅館に着いた。

「ようこそおいで下さいました」

女将が三つ指ついて迎えてくれる。やっぱりこうでなければ。

今回私達が泊まったのは竹林に囲まれた部屋。居間と寝室は完全に別れていて、竹林の真ん中に大きな部屋専用の露天風呂もある。

開け放った窓から爽やかな竹の香の風が通っていった。辺りは酷く静かだ。

「やっぱりこれこそ旅館・・・！」

京介が満足げに言った。

「竹がすごく綺麗ね。あの真ん中のお風呂気持ちよさそう」

思わずそう言うと、京介が私をみて笑った。

「あのさ、リラ。普通に部屋に露天風呂あるトコ取っちゃったけど」

ニコリと取っておきの笑顔を見せて。

「俺と一緒に入ってくれるの？」

私も極上の笑顔で笑ってやる。

「折角だしね？貸し切りとかもあるんだから一緒に入らないと楽しめないでしょ？」

「へえ。…その後は？」「んー、流れ次第。まあそれも修学旅行で出来なかった事の一つとしてアリか。」

「わー、結構乗り気ー？」

「さあ。とりあえず晩御飯まで時間あるし大浴場入って来ようか」

大浴場にも自分以外の人はいなくて本当にゆっくり浸かれた。京介じゃないけどこれこそ温泉。

浴衣を着て部屋に戻る時にはガラス張りの廊下は外が夜なのでもう暗く、そこにポツポツと点してあるキャンドルがとても幻想的だった。

この旅館では流れる水の音と、風で鳴る竹の葉の音しかしない。酷く現実から離れた空間。

部屋に戻るとすでに京介が居た。藍色の細身の浴衣。

「まあ予想はしてたけど、リラ似合うね、浴衣」

「京介こそ嫌味な程似合うよ」

「ハハハ意外性がなくてゴメンねー？」

「そんなはだけててもこの部屋来るのさっきのおばさん女将くらいだよ。何、あの人狙い？」

「イヤイヤ流石に冗談キツイって。リラ俺女なら誰でも良いと思ってない？」

「え、違うの」

何故か京介は絶句しているようだったが、ちょうどその時女将さんが晩御飯の知らせに来たのでその話は中断した。

季節の懐石を水菓子まで終了して。

のんびりお酒を飲みながら大きな窓から風に揺れる竹を見ていた。

「あ、月」

「うん？あ、良い位置に」

「ちょうど良いから彼処のお風呂入ろうか」

「…マジで？」

「遠慮してんの？私入るよ」

ちょ、待って、と声を見殺ししてさっさと浴衣を脱いで竹林の中に入って行った。湯はちょうど良い温度。

「リラはさー、思い切りが良すぎと言うか男前というか…」

ぶつぶつ言いながら京介も来た。手にはさっきまで飲んでいたお銚子とお猪口。

「あー、気が利くね」

思わず笑っていうと京介も少し困ったように笑った。

「楽しそうだから良いけどね」

「うん、楽しい。一度やってみたかったんだお風呂にこうやってー」

お盆を浮かべてその上に銚子を乗せる。

「完璧」

「いーね。でもオッサンくさっ」

顔を見合わせて笑った。そんな事言ってもお互い楽しんでいるのは分かっている。

笑っていたら風が吹いて。同時に空を見上げた。

「本当にキレー……」

「風光明媚ってこうゆうことだよね」

露天風呂を囲むような青竹の上には少し欠けはじめた月。光源が少ないので星も満天に輝いている。

体は温まっても顔を撫でていく風は涼しくて気持ちが良い。

黙るとまた水音と竹林のサラサラという音しか聞こえなくなった。

「あ、なんかアレ思い出した」

私がポツリと言うと京介が目だけをこちらに向けた。

「ん？」

「人が虎になる話」

「…山月記。あーあれ竹林だったっけ？中国だよね」

「そうアレ。自分の才能に驕って回りを見下していた男が虎になって自分が人間だった事すら忘れる話」

まだ月を見上げたまま話した。

「私アレ読んだ時、驚いた。昔の中国にも私みたいなヤツがいたんだなって」

続ける。

「周りを見下しきってて誰も信じてなくて、それ自覚しててさ。虎になっても仕方ないよね。心が獣って事だから」

「ディズニーにもあったよな人が獣になるって。美女と野獣か」

「ああ、そっちはヨーロッパだよ。その野獣は愛の力で人間に戻れるけど、それって元々人間だったからのよね。こっちは、山月記の主人公は愛を知らないんだから、元々人間じゃない。だから獣から戻れないんだなあって思った。そっちのが幸せなのかなとも」

「へえ、面白い見解だな。まあでも」

京介も月を見上げていた顔をこちらに向けて笑って。

「リラが虎になるなら俺もなりそうだよな。一緒に人里でも襲ってみる？」

真剣な顔で頷いてみせる。

「京介に会ってからそれ実際考えた。あの時代の中国なら銃とかもなく狩られなさそうだし。しかも2頭ならやりたい放題？」

「周りの人間達恐怖のどん底に突き落としちゃったりね。楽しそー。まあ結局虎になってもそんな悲観はしなさそうだな」

笑って京介はまた御猪口を傾けた。

「だって悲観しようにも自分の隣にも虎になったどうしようもないヤツがもう一頭いるんだもんね。馬鹿らしくなりそう」

「人でなしは元々だしー？」

アハハ、と空を見上げて京介が高笑いした。

「やっぱり単独犯か共犯がいるかは全然違うよ、気持ちが」

ねー共犯者さん、と笑いかけてやる。調子に乗って京介が抱きしめてきた。

「俺がいて良かった？」

顔を覗き込んで笑って聞かれる。

「うん。一緒に風呂入ってて酒のみながら文学の話出来るヤツなんて貴重」

わざと茶化して答える。

「あれ。あー、そういえばさ、さっきりら俺が女なら誰でも良いみたいなこと言ってたけどさあ」

「うん、違うの？」

「まあSEXするのは正直結構誰でも良いけどね。一緒に居る相手はもう誰でも良くはないな」

「へー、それもしかして、私？」

「うん」

「恋愛ではないよね」

「その辺難しいな、俺恋愛したことないから」

「私も良く解らないし。まあ今までと変わらないよね」

「そうだねー。どうせ離れられないよきっと」

わー怖いよそれ。とお風呂でじゃれあいながら。やはり想像していた運命の相手とはかなり違ったが。会えて良かったと思えたのだった。

その夜どうだったかって？それはまあ、うん。

髪とお酒と密室事件

髪を切った。街を歩いていて「カットモデルやりませんか？」と声をかけられたから。モデルやるならたいていの場合は無料。か、下手したらバイト代を貰える。ちょっと伸びてきていたしちょうど良かった。

「おっかえりー。あれ？リラ髪切った？」

帰ると何故か自宅に京介が。もう慣れちゃいるが。

「流石に目敏いわね。2cmくらいしか変わってないのに」

「女の髪型に敏感なのはモテる男として当然です」

胸を張って言うが、それ誇るトコ？あと自分でモテるとか事実でも言うな。

京介が座っていたソファに腰掛けると、興味深そうに京介が髪を触ってきた。

「こうゆう髪型似合うのは流石だと思うよ。頭ちっちゃいねー。」

大きさを確かめる様に両手で頭を鷲掴まれた。遠慮というものがない。

「リラ最近ずっと髪短めだよねー。伸ばさないの？」

「伸ばすとまた怪奇現象が起こるかもしれないじゃない？」

「あーアレ。驚愕したよな…。」

京介が思い出したように頷きながら言う。その、アレとは。

まだ私の髪が長かった頃、京介と出会って間もなかった時の話だ。

その時は、まだ自分そっくりの相手にお互いかなり警戒心を持っていて、何故か気になってお互い関わらずには居られないものの、表面上は当たり障りのない感じに接するという緊張感に満ちた関係だった。

だが、そんなある日。

京介がいきなり「リラの家行ってもいい？」と何気ない感じに言ってきて、迷いはしたが腹を括って了承した。やはりお互いこの辺で正体を晒してみなきゃいけない気がしたのだ。腹の探り合い

には疲れてきていた。

だが、家に来た京介が持ってきたのは大量のアルコール類。

「友好を深める為にねー、リラちゃんお酒好きか解らなかったけど、軽いのもあるしー。」と京介は何気ない風にヘラヘラ笑っていた。私は驚いた。コイツ、さては私と同じ事狙ってやがるわね。

私も家にアルコール類を用意していたのだ。目的は、酔わせて相手の口を軽くさせ、腹の探り合いで優位に立つ事。酔ったフリで色を仕掛けられる利点もある事も考慮の上。

流石同じ笑顔を作る人間、似たような事を考える。

「わー、お酒結構好きなの。そんなに強くはないんだけどね。私も今日用意してたんだあ」

「えー、会い合うねー。俺もそんな自信ある方じゃないから、軽ーく飲もうか。」

表面だけの薄ら寒い会話を交わしながら、目を見てお互い本当は何を考えているか理解している。

へえ、お酒で嵌めようって事は自信あるんだ？面白いじゃんコイツ。まあ潰れてから悔しがればいいわ。

ニコニコとじゃー狭いけど入ってー、お邪魔しますー。なんて会話を交わしながらも腹の中は相手を落とし入れる気満々だった。

結果。

最初はお互い力量を見せずに探り合いながら飲んでしたが、両方一向に潰れる気配がない。

その辺りでは当たり障りのない毒にも薬にもならない会話を交わしながら飲んでしたが、そのうちお互い本気になりだした。あー、グラス空いたね、注ぐよと親切めかして相手が飲み干した途端に酒を注ぐ。勿論さりげなくアルコール度数が強くなるようにして。静かな攻防戦。お互い意地もあるからソフトドリンクに逃げることもしない。

勝負が見えなかった真夜中、遂に事態は動いた。

一度トイレに立って戻って来てグラスに口をつけたら、明らかに私のグラスのアルコール度数が増えていた。

コイツ…！！

思わず隣の男の顔を見ると、「何どーかしたー？」とシラッとした顔で抜かした。

コイツ、私が居ない隙に、グラスにスピリッツ足しやがったな。

汚ないマネを、だが証拠もないのにそれを口で言うのはスマートじゃないわね。第一、コイツが先に席を立ていたら私もソレをやっていただろう。

私は堪えてニッコリ笑い、新しいお酒取ってくるね？と言って冷蔵庫に向かった。

こうなったらもう目的とかどうでもいいわ。アイツ潰す。絶対酔わせて私が勝つ。

そのために、私も最終兵器を取り出す。

コーヒーミルク。

聞いた事があるだろうか。牛乳を飲んでからお酒を飲むと胃に膜が出来て酔いづらくなるという話。医学的に正しいのかは謎だが確かにコレは効く。

しかも、乳成分が濃いコーヒーミルクなら余計に。

コレだけ飲むのはキツイが仕方がない。一気に飲んで、アイツもコレを知っているとマズイので隠した。

何食わぬ顔で戻って、アルコールのキツイグラスを飲み干してやる。京介は「思い切りいーねー」と言いながらも、不審気に私を見てきた。もう遅い。

その後も差しつ差されつしていて、途中でコイツかなりキてる、と自分もグラグラしている頭で思った所までは覚えている。なんだか、最後の方はお互いテンション上がってヤバいくらいに笑い合ってた気もするが、正直、あまり覚えていない。

ところで、この話は元々私の髪に関する話だったことを覚えているだろうか。

事件はそんな状態のなか起こったのだ。

気づくと、空が明るかった。

いつの間にやらソファに倒れ込んで眠っていたらしい。ひたすら重い体を起こすと、床で京介も屍の様に寝ていた。

あれ、昨日結局どうなったんだろう。覚えていない。記憶無くすまで飲んだのなんて初めてだ。今まで互角に飲めるような奴と飲んだことが無かったのだ。だからといって今思えば昨夜は何であんなにムキになって飲んでしまったんだろう。互角だったとしても普段の私ならもっと冷静に途中で下りたりしただろうに。そういえば当初の目的も果たしていないなんて本当にらしくないし。2日酔いなのか頭も重い。いや、軽い？なんだか変な感じがする。

とりあえず京介の様子を見てみた。

「京介君、大丈夫？床で寝てたら風邪ひくよ？」

「ん……あれ？」

最初薄く目を開け、それから驚いた様に飛び起きた。

「俺いつの間に寝てた？」

「私も今起きたんだけど…覚えてない。飲みすぎたね」

「あー、記憶飛んでる…うわ俺なんでこんなになるまで…」

なんだかショックを受けたように呆然としてから、改めて私を見て怪訝な顔をした。

「リラちゃん髪どうしたの？」

「え、何？」

「短く…なってるよね、昨日より」

言われて何がなんだか解らなかったが頭に触ってみた。

無い。

背中の中ぐらいいまであった長い髪が、途中から。

「…ハ？」

一瞬何コレ夢？とか思いながらも慌てて鏡を見してみる。

無い。

本当に、無い。肩の上辺りで切られている。

「…」

声も出せずに固まっていると、京介も不審気に眉を寄せたまま聞いてくる。

「自分でやったんじゃないよね？」

「まさか」

いや、覚えてないんだけど。

「え、じゃあもしかして…俺？」

自分を指差して言う。まあ消去法ならそうなる。部屋に2人しか居なくて片方が殺されればもう一人が犯人と言うのは推理小説の鉄則。殺されてはいないが。

「いやゴメン、そんなことした覚え全くないんだけど。記憶飛んでるし」

容疑者は犯行を否認。

「ハサミで切られるよね…？リラちゃん、この部屋のハサミは？」

凶器の搜索。

「いつものトコに入ってるみたい」

手掛かりとはならず。

「そういえば切った髪無くない？」

気づいた。

2人でしばらく物的証拠の搜索。部屋の中には見付からない。今のところの容疑者京介は荷物なんて持ってきていない。

結構髪は量かさばると思うのに、何処にもない。

「…マジでどーゆう事？」

「さあ…さっぱり…」

しばらく顔を見合わせて。

「部屋の中には2人。双方泥酔状態だったので証言不可で目撃者も無し。アリバイも勿論無しね」

京介が確認するように話を進める。

「まあ推理小説なら部屋に2人いてどっちかが死ねばもう一人が犯人ってのがセオリーだね。」

やっぱり同じ様な事を考える。

「自殺って線もあるけど」

ここは一応フェアに言ってあげた。

「まあどっちにしろ。衝動的に殺人や自殺をすることがあるように、酔った人間が髪を切ってしまうのは有り得ない話ではないよね。でも切った髪が見付からないってのはおかしいよな。密室から死体が消えるようなもんだよ」

京介は眉間に指を当てて探偵のポーズ。あれ、楽しんでる？

「あ、ちょっとまって京介君」

「ん？」

「この部屋って密室だったのかな」

まず前提が確認出来ていなかった。玄関の鍵をチェック。

思いっきり、開いていた。

最初から密室じゃなかったらしい。

「…外部犯の犯行って推理小説では反則よね」

「まあ所詮はリアルってこんなもの？でも気付かないかなー、いくら酔ってても誰か入って来て…」

結局真相は解らない。リアルってそんなもの。真実はいつもひとつな訳がない。

「…プッ」

なんだか急におかしくなってきた。

「リラちゃん？」

京介が急に吹き出した私に怪訝な顔をする。

「だって笑えるじゃない、有り得ないって朝起きたら髪切られてるとか！」

アハハハハ、と止まらなくなってお腹を押さえて笑い続ける。

「うーん、女の子が髪切られたなんてショックかなーって思って堪えてたけど。実際、かなり、笑えるよね」

京介もククッと堪えながら笑っている。

「しかも私とアンタが初めて飲んだって時に！やっぱりアンタに関わるとロクでもないって」

まだ笑いながら言ってやる。

「えー、俺のせい？てーか飲み勝負一体どっち勝ったんだ？」

京介も堪えてるのをやめて笑いながら思い出したように言う。

「覚えてないって、てゆーかアンタ人のグラスにスピリッツ足したでしょ！」

「君こそなんか乳系飲んだだろ？コーヒーはあるのにミルクが無いっておかしいだろ！冷蔵庫見たよ！！」

「調べたんだ？」

もうそこで限界、本当に笑いが止まらなくなって涙がでるくらい笑い転げた。

「あー、このコ有り得ねー！汚ねえ！ってそれみた時思ったよ」

笑いの合間に京介が笑い過ぎて苦しげに言う。

「アンタよりマシだって！女の子相手に真剣に潰しにかかる奴いる！？」

「俺のがマシだろ！？君、色気も使おうとしてたろ、絶対！」

「あー、途中でそんな気なくなったけど……」

涙を拭きながら言う。

「アンタ相手に使うの悔しいし」

「何それ」

「真剣勝負で勝ちたくて」

「え、お互い結構ルール無用だっただろ」

面白そうに京介が言う。

そういえばいつの間にか表面じゃなく本音のでてる。

目を見れば、楽しげに細めた目が何を言っているかは解ったが、あえてお互いに声に出して言う。

「(アンタ・君)、最悪だね！」

☆☆☆

「そんなこともあったなー、いや懐かしいね」

ハハハ、と軽く笑う京介を横目に、あの時京介を家に呼ばなきゃ今こう入り浸られることもなか

ったんじゃないかと昔の軽拳を少し悔いていたのだった。

Per favore!

ちょっと用事があって、京介に電話をした。

「Pronto、リラ」

「アンタ何時からイタリア人になったの」

「俺今イタリアにいるんだよ」

「…昨日普通に会ったわよね」

「それから帰ったら親父に拘束されてさ、自分の代わりにイタリアで色々パーティーに出ろって飛行機に担ぎ込まれて。今日も1個出たけどまだまだある」

「あー、そう。良いところのお坊っちゃんは大変ね。じゃあ頑張ってね」

「ちょ、何心算ってない感じにすぐ電話切ろうとしてるの。せっかく珍しく電話してきてくれたのに」

「明日うちに来るのか聞くつもりだったけど、もう解決したし」

「え、会いたかった？」

「来るなら食材が足りないから買ってきてって言おうと思って」

「そうか、でもイタリアだからね…しばらく帰れないしなあ…あ、そうだ、リラ」

「それじゃ、バイバイ」

「切るなって！凄い良いこと思い付いた」

「私は嫌な予感がするけど」

「リラもイタリア来れば良いじゃん」

「No.」

「いや、俺もパーティーに一人で出るのは肩身狭くってさ、イタリア人みんな女連れだし。」

「面倒臭い」

「費用とかは親父に請求して良いよ、パーティーの代わり押し付けたんだからそれくらいするだろ」

「それなら誰か適当なコ連れてけばいいでしょ」

「こっちのパーティーならイブニングドレスだよ？並の日本人には着こなせない」

「アンタ今の彼女に読者モデルやってるコいるって聞いたけど」

「まあ顔は可愛いコだよ、でも読者モデルなんてね、結局体型が日本人なんだよ。手足が短いから日本で友人の結婚式に着てくようなパーティードレスは似合っても正式なのはね。どうしても見劣りするし連れてる俺まで格好つかないでしょ。それに英語も話せない様なコ連れてきたって楽しめないよ。頼むって、Per favore!」

「えー、」

「リラオペラ見たいって言ってたろ、パーティー終わってもまだしばらく居て遊ぼうよ。オペラ見てからバール行ってイタリアワインを飲もう、それにまだヴェローナ音楽祭やってるだろ、丁度良いよ、チケット取るから」

「…ヴェローナね。」

「恋人達のヴェローナだしね」

「…ロミジュリね。わかった、行くよ」

「Grazie!!じゃあ手続きしとくから。俺はリラ着く頃にはフィレンツェにいるから、リラもそこに」

「フィレンツェか、ドウオモ前で待ち合わせでもする？」

「人多そーだなー。でもじゃあそういう事で、また連絡する。ハハ、リラとヴェローナって楽しみだな」

「オペラはお互いに興味ないと面白くないしね」

「まあそれもあるけどさ。じゃあ待ってるよ、キャピュレット家のお嬢さん」

「なるべく早く行くわねモンタギュー、ってキモい会話」

「名字なだけマシだろ？じゃあ本当にバイバイ、Buonanotte」

「うん、おやすみ」

